

## 「神に書き記される」

マルコの福音書 1:21~22

### はじめに

「聖書はすべて神の靈感によるもので… (Ⅱテモテ 3:16 新改訳 2017)。」と記されていますが、実際聖書を読んでいて「これは別に書かなくてもいい。」と思う箇所はないでしょうか。またそうは思わなくても、無意識のうちに「ここはあまり重要ではない」と判断して、特に気にも留めないうで読み飛ばしてしまうことはあると思います。今日の箇所にはそんな「取るに足りない」と思ってしまうような記述が含まれています。私たちクリスチャンは聖書の御言葉を互いに送り合ったりしますが、今日の箇所をそれに使った人はあまりいないと思います。そんなあってもなくてもどちらでもいいような御言葉があるのでしょか。今日はそんな疑問に答えるメッセージとなっています。

### 1. カペナウム

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:21 それから、一行はカペナウムに入った。イエスはさっそく、安息日に会堂に入って教えられた。

イエシュアとその一行すなわちガリラヤの漁師であったシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとは、ガリラヤ湖の北に位置するカペナウムという町に入られます。と言ってもこの町は彼らがその時住んでいた町であったようです。カペナウム(כַּפְרֵנָּח)とはコフェル(כֹּפֶר)「村」という意味の名詞と、ナーハム(נָחַם)「慰める、あわれむ」という意味の動詞が組み合わさった名前です。「慰めの村、あわれみの町」という意味だと考えられます。今日でも「癒しの空間」とか「やすらぎの場所」などという表題をつけた娯楽施設や保養施設が多くありますが、このカペナウムもそのような場所にしたいという願いのもとに名付けられたのでしょうか。「慰める、あわれむ」と訳されたナーハムとはそもそもどのような場面で使われた言葉だったのでしょか。その最初の言及を見て、その本来の意味を考え、イエシュアがなぜこの町に来られたのか、この町を選ばれたのかを考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】

創世記

5:29 彼はその子をノアと名づけて言った。「この子は、【主】がのろわれたこの地での、私たちの働きと手の労苦から、私たちを慰めてくれるだろう。」

これはノアの箱舟の物語の主人公、ノアの誕生についての言及です。ノアの父レメクは「この子は…私たちを『慰めてくれるだろう』。」と言っている部分に聖書で最初のナーハムがあります。ではここでレメクが言っている「主がのろわれたこの地での、…働きと手の労苦」から「慰められる」ナーハムされることとは何を指し示すのでしょうか。それはこの慰めの子である「ノア(נֹחַ)」という名前に表されて

いると考えられます。この名前はヌーアハ(נוֹאחַ)「とどまる、休む」という意味の動詞の派生語と考えられ、この最初の言及は創世記 2:15 で、神によって最初の人であるアダムがエデンの園に置かれる場面にあります。

【新改訳 2017】

創世記

2:15 神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

ここで「エデンの園に『置き』」と訳されているのが聖書で最初のヌーアハです。このようにヌーアハとは本来、神によって人がエデンの園に「置かれる」、住むこと、そして「そこを耕させ、また守らせた」とあるように、住む場所としてだけでなく、働く、活動する場所としてもこの園に「置かれる」ことを指し示していると言えます。ノアの父レメクは、彼らの祖であるアダムからこのエデンの園についての話を聞き、人が再びそこに住まうことを願い、その思いを息子に託して名付けたのだと考えられます。ですからナーハム「慰める、あわれむ」とは本来、人があらゆる労苦から解放され、呪われた地ではなく神によって祝福された地である「エデンの園」に住む、生きることを指し示していると考えられます。ですからこの「カペナウム」という町は、エデンの園の「型」として、「慰めの村」ではなく「エデンの村」としてここに記されていると考えられます。そこにイエシュアは、御自分をご覧になり、呼び集めた、すなわちお選びになった弟子たちとともに入られました。ここに「エデンの園」に入るための方法が示されていると考えられます。つまりそれはこの「エデンの園」に入るには、イエシュアに目を留められ、呼び集められ、そしてこの御方に聞き従う必要があるということです。このように「一行はカペナウムに入った。」という一見何の変哲もない状況説明のような文章の中にも、ヘブル語の視点で見ると、そこには神の御計画が表されていることが分かります。

## 2. 安息日

そしてカペナウムに入られたイエシュアが、安息日に会堂に入られたこと、そしてそこで教えられたことが明記されています。「安息日」はヘブル語でシャバット(שַׁבָּת)と言い、その起源は神が天地創造の御業を完成され、そしてその第七日目に休まれたことにあります。

【新改訳 2017】

創世記

2:1 こうして天と地とその万象が完成した。

2:2 神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。

2:3 神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。

シャバットとは、「神は…すべてのわざを『やめられた』」と訳されているシャブアト(שַׁבָּת)という動詞が名詞化したものです。「やめられた」というのは、中止や休憩のことではなく、もう何も付け加える必要がない、まるで一つの作品が完成したかのような、天地創造の御業の「完成」を覚える日、それが「安息日」です。創世記 1～2 章を読みますと、この神の天地創造の御業は、人とその妻すなわち

アダムとエバが、エデンの園を守る者として置かれた、そこに入ったことで「完成した」と記されています。イエシュアが弟子たちとともに「安息日」に会堂に入られたというこの出来事の中には、先ほどのカペナウムという名についての言及と同じく、イエシュアとともにエデンの園に入ることが示され、それが神の御業、その御計画の「完成」であることを指し示しておられると考えられます。つまりイエシュアが「カペナウムに入った」こと、そして「安息日に会堂に入った」こととは、イエシュアとともに、その弟子とされた者たちが「エデンの園」に入るという神の御計画の完成を指し示すメッセージが二度繰り返され、強調されているということです。

### 3. 会堂

また「会堂」と訳されているヘブル語ヴェート・ハクネーシエト(בֵּית הַכְּנֶסֶת)とは、「家、場所、家族、器」を意味する名詞バイト(בַּיִת)と、「集める」ことを意味する動詞カーナス(כָּנַס)が合わさった言葉で、「集会場、寄り合い所」とも訳せる言葉です。この二つの最初の言及も見てみましょう。まずバイトとは本来、創世記にあるノアの箱舟の中に造られた「部屋」を表す言葉です。

【新改訳 2017】

創世記

6:13 神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ようとしている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。見よ、わたしは彼らを地とともに滅ぼし去る。

6:14 あなたは自分のために、ゴフェルの木で箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外にタールを塗りなさい。

かつてこの地上のすべてを水没させた、創世記に記された史上最大の大洪水「見よ、わたしは彼らを地とともに滅ぼし去る」という、この滅びを免れる唯一の方法すなわち「救い」は、箱舟の中に作られたこの「部屋」バイトに入ることだけでした。つまりバイトとは本来、唯一の救いを指し示す言葉であると言えます。イエシュアは御自分とともにエデンの園に入る以外に救いはない、この救いを受け入れない者はみな滅ぼされることを指し示しているのだと考えられます。またこの「部屋」は防水のために「内と外にタールを塗る」ことが記されていますが、ここで「タール（やに、樹脂、アスファルトとも訳される）」と訳されているのがゴフェルと言い、先ほどの「カペナウム」は「慰めの村」という意味だと述べた部分で「村」を意味するゴフェルの最初の言及がこの「タール」になります。ちなみに「タールを『塗りなさい』」と訳された「塗る」というヘブル語はゴフェルの動詞形カーファル(כָּפַר)です。

そして「集める」ことを意味する動詞カーナスは I 歴代誌 22:2 にその本来の意味が指し示されていると考えられます。

【新改訳 2017】

I 歴代誌

22:2 ダビデは命じて、イスラエルの地にいる寄留者を召集し、神の宮を建てるため、石材を切り出す石切り工を任命した。

ここで「ダビデは命じて…『召集し』」と訳されているのがカーナスです。イスラエルの地にいた寄留者、在留異国人たちがカーナス「召集された」理由は、「神の宮を建てるため」でした。この「宮」と訳されているヘブル語は先ほどのバイトです。このようにカーナスとは本来、ダビデすなわち王の命令によって「神の宮（バイト）を建てる」ために人が「集められる」ことを指し示しており、救いとは、イエシュアとともにエデンの園に入ることであり、そしてそれは同時に王であるイエシュアによって「神の宮を建てるために集められること」でもあるというメッセージを導き出すことができます。

以上、ここまでの内容を表にまとめるとこのようになります。

日本語	ヘブル語	最初の言及	意味
カペナウム	コフェル(כּוֹפֵר)	創 6:14	部屋を大洪水から守る…「救い」を指し示す
	ナーハム(נָחַם)	創 5:29	ノア(נֹחַ)の語源ヌーアハ(נוֹחַ)から「エデンの園に住む、生きる」ことを指し示す (創 2:15)
安息日	シャバット(שַׁבָּת)	創 2:2	神の御業の「完成」…人とその妻がエデンの園に住むことを指し示す
会堂	バイト(בַּיִת)	創 6:14	大洪水の滅びを免れる唯一の「部屋」…唯一の「救い」を指し示す
	カーナス(כָּנָס)	I 歴 22:2	神の宮を建てるために集められる

このように、「それから、一行はカペナウムに入った。イエスはさっそく、安息日に会堂に入って教えられた。」という一見何の変哲もない状況説明のように見える文章も、ヘブル語の視点で見ると、イエシュアとともに「エデンの園」というバイト「部屋」に入る以外に救いはないというメッセージ、神の御計画が、表現を変えつつ二度にわたって強調され、またそれは同時に「神の宮」神の家、神の国、御国を建て上げるという神の御計画の完成を指し示しているとも考えられます。

#### 4. 教える

そしてイエシュアは会堂に入れ、そこで「教えられた」と記されています。「教える」ことをヘブル語でラーマド(לָמַד)と言い、申命記 4:1 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

申命記

4:1 今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。

4:2 私があなたがたに命じることばにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。私があなたがたに命じる、あなたがたの神、【主】の命令を守らなければならない。

この御言葉は、神の人モーセによってエジプトから導き出されたイスラエルの民が、いよいよ神が約束された地カナンに入っていこうとする時に彼らに対して語られたものです。ここで「私が『教える』掟と定め」という箇所には聖書で最初のラーマドがあります。このようにラーマドとは本来、神の「掟と定め」、またあなたがた、すなわちイスラエルの「神、主の命令」を守り、それを行うことを指し示してい

と言えます。つまり「イエスは…教えられた」と記されている行為の中に、イエシュアとともに入る「エデンの園」すなわち「神の宮、神の国、御国」には神の命令に聞き従うというルール、法律があるということが指し示されていると考えられます。そしてそれは「あなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。」と述べられているように、「神の国、御国」に入り、そしてそこで生きる者とは、神の命令を守り行う者だけであり、それを拒む者は、アダムとエバがエデンの園を追い出されたように、入ることができない、そこで生きることができないということが指し示されていると考えられます。

つまり「神の国、御国」の中に生きる、永遠に生きるとは、神の命令に永遠に従い続けるということでもあるということです。しかしそのように聞かされると、多くの人は不安になります。今でもほとんど神に聞き従えていない状態、罪ばかり犯しているような自分が、たとえ神の国、御国に入れたとしても、果たしてそこで永遠に神に聞き従い続けることができるだろうかと思ってしまうからです。しかしそのような考え方は、自分の力で神に認められよう、努力して救われようとする思いがある証拠です。はっきり言っておきますが、人の努力やがんばり、技術や才能では人は神に認められもしなければ、それによって救われるなどありません。救いとは神の御計画なのです。そしてその御計画は必ず実現するのです。つまり救われた者すなわち「神の国、御国」に入る者、そこに住み、生きる者とは、永遠に神の命令を守り行う者となる、そのようにされるということなのです。人の努力によってではありません。神の御計画によってそのように定められているため、必ずそのようになる、成就するということです。ですから聖書に記された数々の命令は、必ずそのようになる、という約束、計画の強い表れなのです。このようなわけで、私たちはこの聖書を「福音」良い知らせと呼ぶのです。

## 5. 権威ある者

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:22 人々はその教えに驚いた。イエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者として教えられたからである。

イエシュアは会堂に入り、そして「権威ある者」として教えられました。これはどういう意味でしょうか。ここにはシルトーン(שילטון)という名詞が使われています。その最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】

伝道者の書

8:2 私は言う。王の命令を守れ。神への誓約があるから。

8:3 王の前から慌てて出て行くな。悪事に荷担するな。王は自分の望むままを行うから。

8:4 王のことばには**権威**がある。だれが、王に「何をするのか」と言えるだろうか。

8:5 命令を守る者はわざわざを知らない。知恵ある者の心は時とさばきを知っている。

このように、シルトーンとは「王のことば」を指し示していると言えます。またその王は「自分の望むままを行う」と記されており、誰もこの王に対して「何をするのか」と言って口出しすることはできな

いことが記されています。つまりこの「王のことば」とは決して変わることはない、御心、御計画を指し示しており、イエシュアはまさに王として、神の御計画を語られたということだと考えられます。このように、「権威ある者として教えられた」イエシュアの姿には、神の国、御国の王としての御自分の存在が表されていると考えられます。ちなみにイエシュアの教えは「律法学者たちのようではなく」と記されていますが、彼らの教えとはどのようなものだったのでしょうか。律法学者たちのことをヘブル語でソフリーム(סופרים)、単数ではソフェール(סופר)と言い、旧約聖書では「学者、書記、書記官」とも訳されています。この言葉はサーファル(ספר)「数える、記す」という意味が語源であると考えられ、この最初の言及が創世記 15:5 にあります。

【新改訳 2017】

創世記

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

これは神がアブラハムに対する約束として語られた御言葉ですが、ここで「星を『数えられるなら数えなさい』。」と訳されているのが聖書で最初のサーファルです。ところであなたはこの宇宙に星がいくつあるか御存知ですか？今日に至っても天文学や宇宙科学の専門家たちでさえ「この銀河系だけでも大体数千億個以上の星がある…」というような非常に不明確な数字を述べることしかできません。誰も数えきれない、計り知れない、解らない、それがサーファルの持つ本来の意味が指し示すものです。つまり「律法学者たちのように」教えるとは、聖書に書かれていることが何であるか、つまり神を「天を見上げ」てはいても、神の御計画がどのようなものであるのかが、はっきりと理解できていない者が教える教えのことであると言えます。それに対してイエシュアはまるで「王が自分の望むままを行う」かのようように神がなさること、神の御計画を理解しておられたのです。その事実を、律法学者というまったく正反対の存在を示すことで、イエシュアの神の御計画に対する理解度、聖書の教えに対する理解の深さを、ここに際立たせようとしているのだと考えられます。

## 6. 驚く

そしてその教えに対して、「人々は…驚いた」とあります。この「驚く」という意味の動詞ターマ(תמה)についても見ておきましょう。最初の言及は創世記 43:33 です。

【新改訳 2017】

創世記

43:32 それで、ヨセフにはヨセフ用に、彼らには彼ら用に、ヨセフとともに食事をするエジプト人にはその人たち用に、それぞれ別々に食事が出された。エジプト人は、ヘブル人とはともに食事ができなかったからである。それは、エジプト人が忌み嫌うことであった。

43:33 彼らはヨセフの前で、年長者は年長の席に、年下の者は年下の席に座らされたので、一同は互いに驚き合った。

この記述はアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルの 12 人の息子たちの物語の一場面です。11 番目の息子ヨセフは、10 人の兄たちの妬みと悪巧みによって奴隷としてエジプトに売り飛ばされてしまいます。しかしこの出来事はヨセフを用いてエジプトと近隣の諸国と、そしてイスラエルの家を飢饉から救うという神の御計画による出来事でした。後にヨセフはエジプトのファラオに認められ、王に次ぐ地位と権力を手に入れます。そうとは知らないヨセフの兄弟たちは、自分たちがエジプトの権力者の家でもてなしを受け、そしてその方が自分たち 11 人の年齢の順番を知っていたことに「一同は互いに驚き合った」という箇所、聖書で最初のターマがあります。このようにターマとは本来、イスラエルの息子たちが、誰がどこに座するのかという席順を知っていることに対して「驚く」ことを指していると考えられます。

また更にここで「席に座らされる」と訳されているヤーシャヴ(יָשַׁב)という動詞は本来、「住む、とどまる、住みつく」という意味の言葉で、つまりこの出来事はイスラエルの子どもたち、すなわちイスラエルの 12 部族が「住む、とどまる、住みつく場所」すなわち、神の国、御国における相続地をお与えになる神の御計画を指し示していると考えられます。エゼキエル書の 47~48 章にはその内容が詳細に記されています。このように、出来事としてはイエシュアの教えに人々が驚いたということだけなのかもしれませんが、これが聖書に記され、更にヘブル語の視点でこれを読み解く時、そこには神の御計画が「型」として、たとえ話のように記されていることがわかります。

## 7. 書き記される

聖書に記された数々の出来事は、たとえそれが多くの人々に強い影響を及ぼすような、実際に起こった事実であったとしても、もしこのように聖書に記されていなかったとしたら、それはただの出来事として過ぎ去り、忘れ去られたことでしょう。しかし聖書に記されたことによって、それはただの出来事というだけではなく、今日の私たちに対しても、時を越えてこの世が続く限り、そして神の御心、御計画が完成するまで、それを表すとえ、指し示す「型」となりました。聖書はすべて神の靈感によって書かれた書物です。(Ⅱテモテ 3:16) 神によって書き記されたものは、神の御心、御計画を表し、永遠に残ります。たとえそれが今日取り扱った「カペナウムに入った」、「会堂に入った」というような一見何の変哲もない、ただの状況説明のようなものであったとしてもです。つまり今日の結論はこうです。聖書には、あってもなくてもいいような「取るに足らない」ような記述はありません。

そしてこれは同時に私たちへの大きな励ましです。なぜなら私たち一人ひとりも、一見何の変哲もない、ごく普通の人と思われる存在だからです。しかしそんな私たちの名が、ひとたび天に書き記されたならば、それは神の御心、御計画を表す存在として永遠に残る、永遠に生きる者となる、変えられるというメッセージが聖書の中にはあふれているということです。

【新改訳 2017】

ルカの福音書

10:20 あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。

天に名を書き記された私たちが、神の御心、御計画を表す存在として変えられる日を待ち望みましょう。御国が来ますように。主イエシュアよ、来てください。